

研修会のお知らせ
25ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成27年3月1日発行

2015.3
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

3号

第37巻
No.308



モモ *Prunus persica* Batsch (バラ科 *Rosaceae*)

生薬 トウニン（桃仁）初夏、果実が成熟する時期に採取し、果肉と核殻をとり除き、陽乾する。

成分 青酸配糖体：amygdalin, prunasin、脂肪酸：oleic acid, linoleic acid、酵素：emulsin、ステロール類、タンニン等。

効能 婦人病に用いる代表的な生薬で、桂枝茯苓丸、大黃牡丹皮湯、桃核承気湯などの漢方処方に配合される。



生薬 モモ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



中国の甘肅、陝西省を原産地とする桃は主に婦人薬として用いられ、特につわりを癒す特効薬として用いられたことから、出産の喜びと結びつき一族の繁栄を象徴する果物として尊ばれ、悪霊や悪鬼を払う呪物として用いられました。これらのことが西王母伝説の要素の一つとして用いられたものと推測されます。長寿の神、西王母は西域の崑崙山に住み、不老不死の霊薬を持っていたと考えられています。西王母が所有する蟠桃園には九千年に一度熟す実を食べると天地のあらん限り生きることができるという桃が植えられていました。『西遊記』ではこの桃園の管理人を命じられていた孫悟空が蟠桃会（西王母の誕生日）に招かれなかった事の腹いせに、九千年に一度熟す桃を盗み食いし、大暴れをする場面があります。また、『山海経』（戦国時代、約紀元前400～200）の度朔山伝説には、「巨大な桃の木の東北の枝間に鬼門があり、万鬼が出入りする。見張りの神荼・鬱壘の二神はその悪鬼を捕らえて虎に食わす」と述べられ、中国の門神信仰や日本の鬼門信仰の起源ともなっています。

以上のように中国と桃は深いつながりがあり、桃仁は『神農本草経』の下品に収載され、「味苦平。瘀血、閉瘕、邪気を主り、小蟲を殺す。」と記され、重要な血剤であることが分ります。李時珍は「桃は性花が早く、植易くして子が繁る。故に文字は木、兆に従ふので、十億を兆といひ、その多いといふことを言ったものだ。」と語源を言っています。和名のモモも「百百」と書き、多くの実を付けることから名付けられたと言われています。

日本に桃が伝わったのは奈良県の纏向遺跡（3世紀）から多くの種が出土したことから、かなり古い時代であることが分ります。『古事記』（712）やに『日本書紀』（720）には桃で鬼を追い払うことが記され、後の桃太郎伝説に受け継がれたのではないかと考えられます。『万葉集』（770～780年頃）にも7首に詠みこまれていますし、『延喜式』（927）の典薬寮には54ヶ国中40ヶ国から献納され、美濃國からは最も多い六斗三升が献納されていることが記されています。

始めの頃の栽培は花を觀賞するためのハナモモが多く、『和名抄』（931）には「冬桃」、『下学集』（1444）には「緋桃」の品種名が登場します。ほとんどの品種は江戸時代になってからで、200品種以上の品種が作り出されていました。しかし、生食用品種は30品種程度で、『農業全書』（1697）には「先伏見のさも、同五月も、大うす桃此等の三色勝れて味ひよし彼地の名物なり又西王母と云はむかしより名を得て大き桃なり鏡どをしとて甚ふとく見事なるものあり」と述べていますが、この頃の果実は毛が長く密生し、小さく、果肉が堅く、甘味が少ないものであったようです。また「又桃仁は薬に入る物なり核子を多くあつめては薬屋にうるべし」とも追記され、仁は良質の物が取れたようです。現在の甘く、大きく、瑞々しい品種が出来たのは、明治時代に中国や欧米から新しい品種が入ってからの事です。逆に現在の生食用桃の仁は小さくて薬には適しません。

（村上守一 記）